後一層必要となるに違いない。

なお，生産地域についての具体的な資料の分析が望まれるところであるが，かかる点は著者の今後の研究の成果を待つことにして，拙い評としたい。

（外山　秀一）

田中　圭一　著

『帳箱の中の江戸時代史(上)』

刀水書房　1991年8月

A5判　507ページ　6,800円

「“帳箱の中……”とは，何とも魅力的な意表をついたタイトルではないか。思わず開けてみたくなるような書物である。」

この一文で書評を終えれば，それは書評の中の最高傑作として後世に残るでしょう。どんな金銀財宝が出てくるか，開けた人の楽しみにとっておいてあげるのが評者の思いやり，というものだからです。しかし，そんな思いやりなどどこかへ吹き飛んでしまい，評者はいつのまにか，宝を見つけた子供のように，誰かれかまわず発見の喜びを言いふらしたい衝動にかられてしまいました。

宝が出てくるはずです。開いたら，佐渡が飛び出てきたのです。しかもその佐渡は，金掘人夫すべての，そして260カ村の農民一人一人の顔すべてをたちどころに判別出来る能力をお持ちではないかと拝察される，佐渡出身の田中圭一氏の手によって描かれているから，偽物ではありません。

江戸時代史とはいっても，書かれているのは佐渡だけではないか，という批判が出るかもしれません。しかし，それでいいのです。それだからいいのです。この書物の最大の魅力は，佐渡が江戸を，僻地が中央を果敢に攻撃している点にあるからです。佐渡は僻地を代表しており，いかなる農村と置き換えてもいいのです。どこの農村にもある，あるいはあったのが帳箱で，そこに納められている文書の一枚一枚に光をあて，中央から出された法令の矛盾を突き，従来の中央史を塗り替えていこうとします。こうした試みが，佐渡にどっしりと根を下ろしている書物であるが故に成功しています。

著者の，「村から歴史を見る」という視点は，すでに1985年に『天領佐渡1・2』（刀水書房）で披露されており，本書はその補充改定版として位置付けられます。前者には，文書，景観，史跡など数多くの写真がのせられていますので，あわせてご覧になれば，本書の理解がより一層増すでしょう。さて，前者が概ね時代別に綴られているのに対して，本書はテーマ別に編まれています。以下，そのテーマ（章）を紹介しつつ，評者の見つけた金銀の一部をお見せしたいと思います。

序「村への視点，村からの視点」：こうした視点に対して共感を覚えない人はまずないでしょう。歴史学においても戦前はともかく，地方史，民衆史には現在すでに市民権が与えられており，村からの視点を説く人は多い。ただ著者の姿勢は地方史のみを詳述するのではなく，絶えず意識の中に中央があり，中央を考えるが故に中央中心史を攻撃せざるを得ない，という新鮮さがあります。

第1章「村にとっての検地――太閤検地から元禄検地へ――」：検地は支配の側の都合で行われると同時に，村における百姓と土地のあり方とその質的変化の表現である，というのが著者の主張です。検地は一面において，自立する百姓たちの公平の要求の上に組み立てられたものである，という検地の基本的正確をしっかりおさえ，それは太閤検地，元禄検地両者に共通するとしています。では一体，農民が検地に何を求めたか，荻原重秀の手による元禄検地で年貢額が80％も増えたのに農民の組織的な反抗が全くなかったのはなぜか，そんな点に注目して本章を読むと興味が増します。

第2章「土地所有の思想――領有・惣有・私有――」：ここでは，中世の領有，戦国時代からの惣有，寛文期からの私有という土地所有に関する思想と，その変化の過程を開発，売買などの事例をあげてわかりやすく説明してあります。その中で，わが国にあって「地主」の基本的性格は，近世初頭，百姓の土地所有権・土地耕作権が確立したとき以来，不耕作地主でありつづけたとしなければならない，という指摘は斬新です。こうした観点に立てば，17世紀初頭の鉱山師の土地集積，広範の地主商人の成長などが無理なく理解できます。

第3章「村の身分制――大家と名子――」：中世に広範に存在した大家と名子の制度は，耕地や生産のありようが変わらない地域にあっては，江戸時代に至っても名子は再生産されつづけているとし，ここでも生産のありようが身分制を規定する大きな要因であるとしています。この生産関係を重視する点が著者の力点の一つであり，それはとりもなおさず，村の実情をまず始めに押さえなさいという，繰り返

して主張されている「村からの視点」です。

さて，商業を営みながら耕地を耕すものはいくらでもいたし，鍛冶屋とてふだんは田畑を耕していたという指摘は，近世身分を固定的に考えがちな我々にとって，新鮮です。武士にしてもしかり。長男はともかく，武士の次男，三男たちが，みな武士としてどこかに就職先があるかといえば，平和な時代ではなかなかそうはいきません。実際に，全国各地の元武士が医師や商人になっていることや，逆に武士以外から武士に登用された例が豊富に示されているところなど（247～249頁）は，江戸時代が生き生きしてくる場面です。

第4章「村役人の系譜――名主と百姓――」：中世的な村殿，中吏（ちゅうじ）制から名主へと代わり，そこでさらに「名主になった平百姓」，「無用になった長百姓」などの項目が目をひくように，次第に平百姓が抬頭していく様子がつぶさに描かれています。その間の事情を数多くの訴訟文書によって語らしめるという筆の運びは，歴史学独自の記述法とはいえ，著者の豊富なデータバンクがものをいっており，迫力があります。なお，この章でも従来の「幕府に従属する主体性のない存在としての名主像」を否定して，百姓から選ばれたもの，すなわち村の側からみるという基本視座が貫かれています。

第5章「家と家族――生産と生活の組織――」：近世に入ると，中世の大家一名子が包括された生産の単位としての「名」が解体して，「家」が，しだいに生産と消費の両方の性格をあわせて独立していきます。開墾がすすめられる過程で名に含まれた名子の家が開墾の単位となり，生活単位である家族が余剰を残すことができるという点で，生産意欲が高められ，そのまま生産組織の核となる経営が成立したとしています。家族員数は「制度」や「主義」が原因で決定されるのではなく，生産のあり方によって規定されるという主張は，近世にあっては塩焼き専業の村の大家族制で示されていますし（372～379頁），現在の核家族化においても高度の機械化による農業経営を重視して説明されています（『日本歴史』1992.1，52頁）。

「さんせう太夫」の世界，「金掘人夫」，「遊女」と，とかく「奴隷」的イメージの強かった「身売り」に対して，積極的な評価，プラスのイメージが与えられていることは，「近世の身売りは，発展する近世の産業社会の中に生まれた」，「身売りを望む人が町にあふれた」（402頁）などの文言によく表われています。

第6章「村の掟――生産と生活の自治――」：消費・生活・家計の単位であると同時に，生産・経営の単位でもあるという近世の「村」が，どのような経過で成立し，展開・変質していったかを「村掟」をもとに考察しているのがこの章です。村掟が幕府や藩の法令とは違い，近世の村の自治そのものであるとの認識からとりあげられている点で，本書で欠かせない章になっています。

帳箱の中の資料はすべて村の掟である，との広義の前提がありますが，具体的には，山論のすえ2つの村が共通の掟をつくった話，入会秣場の資源利用がいかにはげしいものであったかを示す証文，山の開墾と山林の個人分割に関する村中立合い連判手形，蛸場の掟，海草採りの掟，村八分の背景など，いろいろでてきます。

ここで上巻は終わりです。続きは「近世商業文化論」という副題のつく下巻（1992年予定）に期待しましょう。

さて，本書で，国民的知識の規準と著者が思っておられる高校教科書が絶えず批判の対象となっているのが少々気になりました。そのこと自体は本書の論旨を明確にする上で有効に働いています。しかし，検地論をはじめ本書の各テーマにおいて，教科書にのるまでには至っていない最新の議論が歴史学の上で展開されているのでは，と思います。そうした議論をも積極的に取り入れられて論戦がしくまれていたならば，さらに楽しい書物になっていたように思われます。また，名経営が畑作地帯で残り，水田地帯で解体したことの理由として，前者では一時に大量の労力を要し，共同経営だけが二毛作を可能にしたのに対して，後者では早稲・晩手の出現，苗代の出現など農業技術の上下均等に革新を背景に，しだいに繁茂期の山がとれ，個人経営の導入によって生産力が向上した（204頁）とあり，経営のあり方に注目する点では賛同しますが，いまだに労力の集中する時期は畑作より水田地帯の方にあるように思えてなりません。

ところで著者はことさら地理学者を槍玉にあげて批判しているわけではありませんが，地理学者にとって耳の痛い文言が随所にみられます。こうした個所をあえて示しておくことは，本誌での書評の意義を増すものと思われますので，最後にその点を2，

3，著者の言葉でもってとりあげておくことにしましょう。

資料の吟味，処理について：「江戸時代の人口や家を係数処理する場合は，よほど慎重でなければならないと思われる。同じ数字的事実がありながら村によって作成基準が異なるこうした結果をみると，これら計数処理はおおまかな傾向を指摘することができても，問題の本質を明らかにするには弱点が多く，質的なことがらを捨象すると同様，それは量的な，常識的な内容や変化を数字で示してみせたにすぎない結果に終わる場合が多いからである」(387頁)。

地域の類型化について：「地域を分けて先進地型とか後進地型，複合型などとする分類がおりおり見られるが，越後や佐渡の村々を詳細に追ってみると，塩焼きとか木材稼ぎ，あるいは畑作地域か水田単作地域とかいうように，その地域の生産のあり方が，「家」のあり方を規制しているように思われる。(中略)。型（モデル）は多くの場合常識的なパターンをつくりだしてはみせるが，それと同時に本質を見る目をもくもらせることになることも想起すべきである」(387頁)。「佐渡では同族団の結合をするいわゆる東日本型の村と，講組的構成をもつ西日本型の村が共存していることになる。もっとも村を東日本型と西日本型に区分してみることは，整理の方法としては有効かもしれないが，それ以上の意義は認められない。問題はモデルをつくることにあるのではなく，その地域がなぜ同族団型の村になるのか，あるいは講組的な村になるのか，ということがより重要だと思うからである」(208～209頁)。

おりしも，1991年度につづいて1992年度も歴史地理学会大会の共同課題が「東北日本と西南日本」ですが，そこでの発表がそれぞれの地区での事例研究，あるいは単なる類型化にとどまらず，2区分に分ける意義とか，西南日本にある東北日本的事象の意味を考えるとかいうような議論が展開されることを期待しましょう。

（溝口常俊）